

特定非営利活動法人 日本小児血液・がん学会
2015 年度評議員会議事録

日時：2015 年 11 月 26 日(木) 16:00～18:00

場所：山梨県立図書館 イベントスペース

開会宣言

堀部敬三理事長より開会宣言があり、本評議員会が、評議員総数 278 名のうち、出席 160 名、委任状 49 名、合計 209 名で、定款に定める成立定足数である 139 名を満たしているため、成立したことが宣言された。

議長は、定款の定めるところにより堀部理事長が務めた。

1. 学術集会会長挨拶

第 57 回学術集会杉田完爾会長より、学術集会について挨拶がなされた。

ポスターセッションの時間を 20 分増加していること、会場でのワイン提供、千住真理子氏のコンサートなど、参加者が楽しめるよう配慮し、活気のある学术交流の場となるような構成としたことが報告された。

2. 議事録署名人の選出

出席者の中から、上条岳彦評議員と、駒田美弘評議員が推薦され、承認された。

3. 一般社団法人設立承認の件

議長より一般社団法人設立について、設立の経緯、現法人からの変更点、現法人の会員は一般社団法人日本小児血液・がん学会の会員資格を有すること及び今後の計画が示され、その承認を全員に諮ったところ、異議なく承認された。

4. 専門医制度規則改正の件

議長は、専門医制度委員会米田光宏委員長に報告を依頼し、米田委員長より専門医制度規則改正案が示され、その承認を全員に諮ったところ、異議なく承認された。

また、会員より、第 40 条第 5 項における「日本骨髄移植財団」の名称は「日本骨髄バンク」へと変更されていること及びその認定は日本造血細胞移植学会が認定することとなっているため、文章の表現を変えるべきとの指摘があった。

5. 名誉会員推戴の件

議長より、名誉会員について 4 名の推戴案が示され、その承認を全員に諮ったところ、異議なく承認された。

6. 物故会員への黙とう

庶務委員会越永従道委員長より報告がなされた。

物故会員 3 名に黙とうをささげた。

7. 庶務報告

庶務委員会越永従道委員長より、平成 26 年度会員動向について報告がなされた。

名誉会員 76 名、正会員 2,111 名 新入会 170 名、退会者 73 名。

8. 役員改選の件

議長は、選挙管理委員会小原明委員に報告を依頼し、小原委員より役員改選について報告がなされた。

理事長選挙当選者

檜山英三（広島大学病院）

理事選挙当選者

理事（内科系）：真部 淳（聖路加国際病院）

理事（内科系）：足立壯一（京都大学）

理事（内科系）：今泉益栄（宮城県立こども病院）

理事・監事信任投票信任者

理事（外科系）：大植孝治（兵庫医科大学）

理事（外科系）：小野 滋（自治医科大学）

理事（外科系）：木下義晶（九州大学）

理事（放射線）：副島俊典（兵庫県立がんセンター）

理事（基礎医学）：上條岳彦（埼玉県立がんセンター 臨床腫瘍研究所）

監事候補者：小林正夫（広島大学大学院）

監事候補者：仁尾正記（東北大学）

9. 平成 26 年度事業報告案および平成 27 年度事業計画

堀部理事長より平成 26 年度の事業報告案について、事業ごとに説明がなされた。

堀部理事長より平成 27 年度の事業計画について、事業ごとに説明がなされた。

10. 平成 26 年度収支決算案及び平成 27 年度収支予算案

財務委員会前田美穂委員長より、資料を基に平成 26 年度収支決算案と平成 27 年度収支予算の説明がなされた。

平成 26 年度収支決算案

収入の部

- 1) 高い会費収納率が維持されていた。
- 2) 第 56 回学術集会は黒字決算であった。
- 3) オンラインジャーナル化により、広告費減となった。

上記の理由により本年度は 6,013,091 円予算より収入増となった。

支出の部

- 1) Pediatric Blood & Cancer の購読費用が追加された。購読者が購読料の半額 (3,000 円) を負担することとなっている。
- 2) 管理費において、理事会・各種委員会の活動量が増え、会議費・旅費交通費・印刷費が予算比支出増であった。
- 3) 公認会計士監査費用が追加された。

支出全体としては、予算に対して 5,755,848 円の支出増であった。

当期収支差額としては、1,812,757 円の赤字決算となったことが報告された。

監査報告

前田委員長より、公認会計士の監査を受けていることの報告がなされた。

田口智章監事より 2015 年 11 月 10 日に監査が行われ、平成 26 年度決算ならびに財産管理の状況が定款に照らし適正であったことが報告された。

平成 27 年度収支予算案

前田委員長より、説明がなされた。会費は一般社団法人にて回収される。

11. 事業報告

(1) 規約委員会

野崎美和子委員長より、平成 26 年度活動報告がなされた。

- 1) 特定非営利活動法人日本小児血液・がん学会定款施行細則の修正案を策定し改訂作業を行った。
- 2) 常設委員会ならびに疾患委員会の委員長を補佐し委員会規程を整備した。
- 3) 役員選挙の電子投票実施にむけて定款細則役員選任条項の修正案を策定し役員選挙日程のシミュレーション案を策定した。
- 4) 一般社団法人日本小児血液・がん学会定款ならびに定款施行細則案を策定した。

(2) 学会誌編集委員会

嶋 緑倫委員長より、平成 26 年度活動報告がなされた。

学会誌 52 巻 2 号より、学会誌の冊子体が廃止され、オンラインジャーナルとなった。

(3) 学術委員会

越永従道委員長より、平成 26 年度活動報告がなされた。

- 1) 学術賞受賞者の件

臨床領域の血液疾患分野より、1名の論文を選定した。

2) 大谷賞受賞者の件

評議員及び名誉会員による投票を実施し、投票結果を受け理事会で討議した結果、2名の論文が選定されたことが報告された。

(4) 教育・研修委員会

大賀正一委員長より、平成26年度活動報告がなされた。

1) 教育セッションについて

第57回学術集会では、「感染制御」「医療安全／研究倫理など」を追加し、脳腫瘍各論の継続プログラムを開始した。

2) 教育セミナーについて

全国7ブロックで、講演と症例呈示による参加型セミナーを開催している。

3) 専門医のための小児血液・腫瘍学テキスト

堀部理事長、越永副理事長、米田専門医制度委員長、大賀教育・研修委員長を編集主幹として評議員を中心とした先生方の執筆により「小児血液・腫瘍学」が診断と治療社から上梓された。

(5) 学術集会プログラム委員会

田尻達郎委員長より、平成26年度活動報告がなされた。

第56回学術集会の方針に基づいて第57回学術集会のプログラム構成を行った。

1) 口演については、抄録は英語で提出、スライドも英語で作成をお願いする。

2) 口演発表については、英語でお願いする場合がある。

3) ポスターセッションを重視し、座長を設けた発表形式はとらないが、発表者は、セッション(1時間)の間はポスター前にいて、質問者とディスカッションができるようにする。各セッションに、モジュレーターを設け、各発表者とディスカッションを行うよう企画(モジュレーターには事前に依頼)。優秀ポスター賞を設ける。

4) 演題募集時にCOIの有無を申請する。

(6) 保険診療委員会

小川千登世委員長より、平成26年度活動報告がなされた。

1) 「医療上必要性が高い未承認薬・適応外薬検討会議」について

検討会議に提出を希望する品目の要望を募集し、要望書を作成、第3回第三期要望に9薬剤10要望を提出した。

2) 平成28年度診療報酬改訂について

学会員からの要望は以下の通り。

医療技術評価（未収載・既収載）：

- ・小児の陽子線治療に対する保険適応
- ・放射線治療に対する小児加算

医療技術評価（医学管理料等）：

- ・緩和ケアチーム加算の小児入院管理料の包括からの除外
- ・15歳以上の未成年者（20歳未満）の悪性腫瘍入院管理加算
- ・血友病在宅静脈注射指導管理料の複雑な止血管理指導料としての見直し

医療技術評価：医薬品：

シタラビン髄注（悪性リンパ腫）、シクロホスファミド（髄芽腫、ウイルス腫瘍）、カルボプラチン（神経膠腫（低悪性度）、中枢神経外胚細胞腫）、ビンブラスチン（神経膠腫（低悪性度））、ピラルビシン（神経芽腫）

今後、提案書を提出予定である。

以下の項目につき、医療技術評価として要望を申請する。

- (1) 緩和ケアチーム加算の小児入院管理料の包括からの除外：当学会を主たる申請者として提案書を提出。
 - (2) 陽子線治療：日本放射線治療学会を主たる申請者として連携申請
 - (3) 放射線治療に対する小児加算：日本放射線治療学会を主たる申請者として連携申請
 - (4) 15歳以上の未成年者（20歳未満）の造血器腫瘍入院管理加算：日本血液学会の優先要望に指定されたため、日本血液学会を主たる申請者として連携申請。
 - (5) 血友病在宅静脈注射指導管理料の複雑な止血管理指導料としての見直し：日本血栓止血学会を主たる申請者として連携申請。
- 3) DPC、公費負担制度等の改善
- DPCについては今期、内保連にて説明と同意やその他医療技術等に関わる人的資源についての情報収集を行っており、これに協力した。公費負担制度については上記医学管理料等の要望を通じ、改善を図っている。

(7) 専門医制度委員会

米田光宏委員長より、平成26年度活動報告がなされた。

- 1) 認定について
専門医52名認定（のべ180名）、指導医認定30名（のべ120名）、暫定指導医のべ277名認定、専門医研修施設4施設認定（のべ104施設）、小児がん認定外科医11名認定（のべ94名）の実施が報告された。
- 2) 新たな専門医制度について
日本専門医機構の定める新たな専門医制度に対応するため、準備中である。
- 3) 研修施設については、現在、現況調査を実施しており、今後、5年間緩和要件を

延長することが報告された。

4) 次年度事業計画

(1)以下の認定作業を平成 28 年 4 月（申請受付期間 4 月 1 日～30 日）に行う。

- ・小児がん認定外科医
- ・小児血液・がん専門医研修施設
- ・研修集会

(2)第 3 回専門医試験を行う。

(3)研修施設の現況調査を行う(毎年 5 月)。

(4)日本専門医制度評価・認定機構（今後新たな中立的な第三者機関が設立される予定）の方針に基づき、日本小児科学会と連携して専門医制度を整備する。

(8) 国際委員会

堀 浩樹委員長より、平成 26 年度活動報告がなされた。

1) SIOP2018 京都開催の件

SIOP 2015 総会(ケープタウン)にて 2018 年度の京都開催が正式に発表された。

中川原章先生を Congress President とし、2018 年 11 月 16 日(金)から 18 日(日)に京都国際会議場にて開催する計画で進めている。

2) Pediatric Blood & Cancer を本学会英文オフィシャルジャーナルとした。

3) アジア交流基金を活用してアジア交流セッションに、ネパール・ベトナム・インドネシア・タイ・ミャンマーから 5 名の研究者を、韓国小児血液・がん学会との研究者交換事業として 2 名の研究者を、本学術集会へ招聘している。

(9) 社会・広報委員会

檜山英三委員長より、平成 26 年度活動報告がなされた。

1) ホームページの改訂について

一般向けページを会員以外の医師、患者、家族、一般市民にわかりやすいような構成とし、本学会からの情報が的確に学会外に伝達されるように改訂中である。また、会員用ページについては、会員に必要な情報を的確に提供できる構成へと改訂中である。

2) JSPHO ニュースのメール配信について

毎月 10 日を配信日として、会員へ情報を発信している。受信するためには、本会へメールアドレスを登録している必要があるため、受信できていない会員は、本会ホームページよりメールアドレスを登録するよう依頼があった。

3) 広告掲載の内規の修正

学会誌冊子体発行の終了に伴い、学会誌への広告掲載場所が無くなるため、広告掲載契約各社に、今後は HP バナー広告へ掲載してもらえよう、ホームページリン

ク・バナー広告掲載要領を改定した。

(10) 評議員資格審査委員会

井上雅美委員長より、平成 26 年度活動報告がなされた。

1) 評議員会欠席者についての扱い

定款施行細則「正当な理由なしに 2 回続けて評議員会を欠席した場合」評議員資格を喪失する、という記述があり、評議員会欠席の「正当な理由」を内規として下記のように定めた。

評議員会欠席の「正当な理由」を以下のように定める。

1. 緊急対応を要する用件（緊急手術など突発的に発生した診療業務など）
 2. 評議員会より優先度が高いと考えられる用件（重要な会議など）
- ※ 予定手術や通常外来診療など予定変更可能なものは「正当な理由」とは認められない

2) 評議員資格更新審査を下記のように定めた。

評議員資格更新審査を 2 期（4 年）ごとに行う。その要件を下記のように定める

1. 評議員任期 2 期 4 年間で、2 回以上日本小児血液・がん学会学術集会に出席していること
2. 評議員任期 2 期 4 年間で、2 回以上日本小児血液・がん学会学術集会で発表していること（共同演者可）

3) 平成 27 年度新規評議員について

新規評議員申請があり、委員会にて検討した結果、18 名を評議員資格適格であると判定し、理事会に推薦、承認を得た。また、学会活動の活発化を目的とし、委嘱評議員枠として脳神経外科領域、看護・医療職領域、整形外科領域から 12 名が新規評議員として理事会に推薦され、承認された。

(11) 診療ガイドライン委員会

菊田 敦委員長より、平成 26 年度活動報告がなされた。

- 1) 小児白血病・リンパ腫ガイドラインは、来年初めに発行できる予定である。
- 2) 小児がんガイドラインは、今年度中には発行できる予定である。

(12) 疾患登録委員会

小原 明委員長より、平成 26 年度活動報告がなされた。

- 1) 疾患登録データを一次調査データとした「二次調査研究」について審議し、会員からの二次調査を受け入れる事が合意された。10 月理事会審議を経て、申請審査手順が以下の様に整理された。

研究代表者は研究計画書を疾患登録委員会に提出

疾患登録委員会は計画書を審議（主に実施可能性について等）→理事会へ送る

理事会で審査 → 承認 → 研究代表者施設倫理委員会審査 →承認
研究代表者施設倫理委員会承認後 → データの提供

- 2) 小児外科学会悪性腫瘍登録への登録情報提供は一度中断する事となった。
- 3) 全国小児がん登録、小児外科学会と疾患登録について協議する事となった。
- 4) 公的研究班や全国臨床研究グループへの疾患登録一次データ（集計済み）の提供について審議し受け入れることとなった。
- 5) 施設別症例数は既に毎年の学術集会で掲示しているが、学会 HP の会員ページに掲載する事となった。
- 6) 全国がん登録法制化への対応として家原委員が代表して厚労省がん登録部会に出席し、情報提供を行っている（学会会員メール）。
- 7) 「小児慢性疾患見直し」について当学会の担当委員会として活動した。新組織の学会では疾患委員会が引き続き対応することとなった。
- 8) 菊田委員が福島原発事故問題について、福島県の取り組みについて情報提供を行っている。

(13) 倫理委員会

前田美穂委員長より、平成 26 年度活動報告がなされた。

学術集会時の演題提出における各施設での倫理委員会または IRB の承認について、次年度は段階的に下記のようなアンケートを演題提出時に行う。

本演題は IRB または倫理委員会の承認を得ていますか。

- はい 承認日(年 月 日) 承認番号()
- いいえ

いいえの場合は 次の質問に回答してください。

IRB または倫理委員会承認不要の報告である。(回答困難な場合は、各施設の IRB または倫理委員会にお尋ねください。)

- はい いいえ

(14) 利益相反委員会

田中祐吉委員長より、平成 26 年度活動報告がなされた。

- 1) 役員等の COI 申告について
今年度分の COI 申告書を書面で収集した。
 - 2) 学術集会講演者の COI 申告について
学会事務局を通じて、抄録提出時に電子申告にて収集した。
 - 3) 学会誌投稿者に関する COI 申告について
学会誌の電子化に合わせて、本年 5 月から収集した。
- 1), 2)については、COI 有の内容を COI 委員会で確認し、一部については詳細の問い合

わせを行った。3)については、移行期ということで若干の混乱があるので学会誌編集委員会と COI 委員会で検討予定である。

4) COI 指針・細則および COI 呈示スライド見本の英語版について

完成し本学術集会でも活用している。

5) 利益相反に関する細則・申告書修正の件

日本医学会の COI マネージメントに関するガイドラインが改訂したため、それに対応するように本会の細則と申告書を修正した。

(15) 臨床研究倫理審査委員会

滝 智彦委員長より、平成 26 年度活動報告がなされた。

16 件の臨床研究倫理審査が行われ、うち 7 件の審査が承認された。

また、学会の体制変更に伴い、臨床研究倫理審査委員会は今後、研究審査委員会となり、学会内の審査のみ受け付けることとなる。現在継続中の審査については、現委員会が審査終了まで対応することとなっている。

(16) 学会あり方委員会

堀部敬三委員長より、平成 26 年度活動報告がなされた。

法人格変更・代議員制・準会員制・会計年度・疾患委員会のあり方などについて検討した。

(17) 緩和ケア等事業委員会

越永従道委員長より、平成 26 年度活動報告がなされた。

厚生労働省委託事業として、小児がん医療に携わる医師に対する緩和ケア研修会を 3 回、小児がん診療に携わる医師に対する小児がんの診断・治療に関する研修会を 4 回開催した。

次年度は、小児がん医療に携わる医師に対する緩和ケア研修会を 1 回、小児がん診療に携わる医師に対する小児がんの診断・治療に関する研修会を 3 回の開催を予定している。

(18) 移行期医療検討委員会

前田美穂委員長より、本委員会は小児科から成人の診療科への移行期医療を検討することを目的として組織され、本学術集会にて第 2 回会議開催を予定していることが報告された。

(19) 造血細胞移植委員会

井上雅美担当理事より、平成 26 年度活動報告がなされた。

1) 小児ドナーの安全性調査に関する疫学観察研究

調査内容は、前回の小児血液がん TRUMP のドナー項目や各施設で作る移植症例リ

ストから記入できる項目とした。研究責任者は橋井委員長へ変更された。経費および回答施設の利便性を考え、サーベイモンキーを用いた調査とすることとなった。このため「小児造血細胞移植ドナーの安全性に関する疫学観察研究」の文言の変更が必要となり現在大阪大学の IRB に変更申請中である。調査票はすでに原案が作成され、大阪大学でブラッシュアップ後本委員会メンバーに模擬回答を依頼する予定である。

2) 小児ドナーの有害事象

小児ドナーに発生した有害事象に対して、造血細胞移植学会ドナー委員会から受ける調査結果をもとに「小児血液・がん学会造血細胞移植委員会からのお知らせ」という形でドナー有害事象を報告し注意喚起することとなった。

3) 一元化登録 (TRUMP) への小児科領域独自データの反映

現在の TRUMP の調査項目は小児科領域の稀少疾患に十分対応していないため、二次調査を含め次世代 TRUMP に反映させていく必要があり、担当者を決め案を作成した。H27 年度の委員会までに意見を回覧し、今後、データセンターと打ち合わせを予定している。

4) 小児ドナー倫理指針英語版

WBMT donor outcome workshop から参加要請があり、小児血液・がん学会造血細胞移植委員会小児ドナー倫理指針の英語版を作成した。世界に先駆けての倫理指針であることから、学会ホームページへの公開を予定している。

5) 一元化登録 (TRUMP) 移行後データ処分、保管

小児血液学会造血細胞移植登録に用いられた登録票の PDF 化、ハードディスク保存終了した。ハードディスクは造血細胞移植データセンター(名古屋)へ搬送された。

6) 移植手帳

造血細胞移植学会で移植手帳の作成が計画され、橋井委員長がメンバーとして参加している。造血細胞移植学会の長期フォローアップ委員会の早川先生が中心となって作成中である。

(20) 再生不良性貧血・MDS 委員会

大賀正一担当理事より、平成 26 年度活動報告がなされた。

1) 小児血液・がん学会の中央診断

1300 例を超え、これから予後調査を組織的に行う予定である。名古屋大学小児科でターゲットシーケンスによる先天性骨髄不全症の遺伝子診断のシステムが整備された。米国血液学会(ASH)、EWOG-MDS、日本血液学会学術集会などで発表する。

2) RCC、RAEB/RAEB、JMML について

委員会にて活発に意見交換・討議がなされた。

(21) 血小板委員会

菊田 敦担当理事より、平成 26 年度活動報告がなされた。

- 1) 疾患登録事業を活用した小児 ITP 疫学観察研究
現在、それぞれの疫学研究担当者が取組み、疫学研究の核として、派生する様々な個別課題として、ワクチン接種後 ITP や先天性疾患との鑑別などについて、個別の発表をおこない、論文化を目指している。
- 2) 先天性血小板減少症の調査・コンサルテーション体制の構築
名古屋医療センターと東北大学小児科にてコンサルテーションおよび解析を担当する研究体制が構築され、診断アルゴリズムの学会 HP 掲載を契機に相談・検査依頼が増加し、先天性血小板減少症・異常症の調査と研究を継続中である。
- 3) 「小児血小板疾患 ML (Mailing List)」の活用推進
- 4) 保護者・患者向け「特発性血小板減少性紫斑病」パンフレットの改訂 (第 3 版)
太田 茂委員を中心に小児血液・がん学会血小板委員会版の保護者・患者向け「特発性血小板減少性紫斑病」パンフレットを改訂作業中です。
- 5) ITP 診療ガイドラインの改訂と情報提供
ITP 診療を取巻く医療情勢が国内外で大きく変化しており、ITP 診療ガイドラインの改訂に相当するものとして、「用語の国際標準化」も含む、学会会員が臨床の場で利用できるような「小児 ITP 診療の参照ガイド (案)」の作成を前向きに検討中である。

(22) 止血・血栓委員会

嶋 緑倫担当理事より、平成 26 年度活動報告がなされた。

- 1) 定期補充療法研究
「乳幼児重症型血友病に対する定期補充療法に関する前方視的研究」で登録された患者数は、P1 群、P2 群、P3 群、P4 群それぞれ 30 例、19 例、8 例、1 例となった。脱落・中止例は各群それぞれ 7 例、4 例、2 例、1 例である。関節の画像所見を専門の担当委員により聖マリアンナ医大放射線科で定期的に評価をしている。数年以内に研究結果をまとめ本学会へ報告予定である。
- 2) カテーテル管理ガイドライン
血友病における留置カテーテルの実際的な指針やガイドラインは日本にはないため、Minds 治療ガイドライン作成の手引き 2007 に従い、中心静脈カテーテル留置に関するガイドラインを作成した。理事会での承認、パブコメも終了し、本年度に本学会誌に掲載された。
- 3) 小児血友病診療ネットワーク活動
平成 27 年 1 月から 10 月 5 日までの症例相談数は 23 件、回答数 74 件 (相談者からの返事も含む)。内容は、出血に関するもの 16 件、血栓に関するもの 6 件、そ

れ以外 1 件。症例相談以外には、化血研の情報、北陸で血友病患者を診察されている先生方へお願い、などであった。

4) 小児腫瘍性疾患における止血・血栓異常

JPLSG の SCT 委員会で企画の『小児造血幹細胞移植における早期凝固異常の出現とそれに対するリコンビナント・トロンボモジュリンの安全性・有効性についての観察研究』のアドバイザーとして百名委員が JPLSG の SCT 委員会と止血・血栓委員会の bridge 役として参加し、この研究の止血血栓領域に関するデータ解析に止血・血栓委員会として協力する予定である。

5) 先天性血栓性疾患について

大賀委員は先天性血栓性疾患の治療ガイドライン策定を目指した研究を厚生労働省の研究班で行っている。治療ガイドラインが整い次第、本委員会の小児血友病診療ネットワークを通じてパブリック・コメントを聞く予定である。

6) 小児造血幹細胞移植後の aHUS の疫学調査と移植後 TAM におけるエクリズマブ使用状況の調査研究（新規）

小阪委員を中心に調査研究を行う予定である。

7) 小児期の定期補充療法に関する指針の作成（新規）

酒井委員を中心に長時間作用型製剤を含めた小児期の定期補充療法のガイドラインあるいは指針を作成予定である。

(23) 白血病・リンパ腫委員会

滝 智彦担当理事より、平成 26 年度活動報告がなされた。

1) 稀な白血病に関する調査

学会登録データ 2006 年～2013 年診断 ALL 中の不明症例及び稀な白血病で、疾患登録委員会を通じて、PTOSH に依頼したところ 186 例が抽出された。本年 9 月の時点で二次調査も全て終了し、症例について現在データクリーニングして解析中である。

2) 「小児白血病・リンパ腫の疫学研究」研究実施計画

研究実施計画書（案）ver.3.0 が提案され、二次調査は行わない方向で内容の検討を行い、委員の間では承認を得た。

3) CLIC（Childhood Leukemia International Consortium）情報

CLIC の基本はケースコントロールのデータベースを持ちより、プール分析で十分な検出力を有する小児白血病の病因に関する研究を行うこと、国際的な小児白血病の臨床的・疫学的な特徴を比較することなどが主要な目標である。現時点で日本ではケースコントロールデータを有さないために、そのままの参加は不可能である。現在 CLIC とは別枠でケースのみを対象にしたアウトカム研究を計画中であり、日本も参加可能性があり、事務局と継続審議交渉中である。日本におけるケースコン

トロール研究について Kevin Urayama が研究計画書を現在作成中である。

(24) 組織球症委員会

前田美穂担当理事より、平成 26 年度活動報告がなされた。

- 1) 日本小児血液・がん学会組織球症委員会規程についての改正
LCH 類縁疾患より、組織球症と関連した疾患とする。
- 2) 「小児 LCH に対する造血細胞移植の日本小児血液・がん学会会員施設に対するアンケート調査による後方視的共同研究」について
臨床研究倫理審査委員会への回答を検討した。
- 3) 「2 際未満で診断された皮膚単独 LCH の疫学ならびに予後因子解明のための後方視的研究」について
研究計画書を新しい倫理指針である「人を対象とする倫理指針」の形式で書き直す。
- 4) JIA 関連 MAS Inclusion Criteria の確定 Genova 会議を受けて
鬼頭委員にご出席いただき、本委員会で検討する。
- 5) 今後の研究課題について
稀少組織球症関連疾患についての全国調査を行う。

12. 第 60 回日本小児血液・がん学会学術集会会長の件

堀部理事長より、理事会における選挙の結果、細井 創会員が第 60 回日本小児血液・がん学会学術集会会長に選定されたことが報告された。

細井 創会員より、第 60 回日本小児血液・がん学会学術集会について報告がなされた。

がんの子どもを守る会創立 50 周年の記念すべき年であるため、「World's Best City to Visit」に選ばれた京都の秋を堪能できるような趣向を今後考えていくことが報告された。

13. 第 58 回日本小児血液・がん学会学術集会準備状況報告

黒田達夫次期会長より第 58 回日本小児血液・がん学会学術集会の準備状況について報告がなされた。

- 1) 会 期：2016 年 12 月 15 日（木）～17 日（土）
- 2) 会 場：品川プリンスホテル アネックスタワー（JR 品川駅前）
- 3) テーマ：基礎医学と臨床医学を一家族のごとく
領域・職種を超えて、合同で扱う小児がん医療をポイントとし、参加者が発言して参加できるような学会を目指している。
- 4) 特別講演：『メラノーマにおける免疫療法』
河上 裕教授（慶應義塾大学医学部 先端科学研究所）
- 5) ポスター・ツアー：
Modulator 2 名を選定。自由ディスカッション時間を設定。発表時間を設けず、ツ

ア形式。発表者はポスター前に待機が原則。発表者が他ポスターの質問などのために離れる場合は、副発表者がポスター前に待機。

14. 第 59 回日本小児血液・がん学会学術集会準備状況報告

石井榮一次々期会長より第 59 回日本小児血液・がん学会学術集会の準備状況について報告がなされた。

- 1) 期 間：2017 年 11 月 9 日（木）～11 日（土）
- 2) 会 場：ひめぎんホール（松山市）
- 3) 副 題：地域から描く子どもの未来図
- 4) 合同開催：第 15 回日本小児がん看護学会学術集会（会長：愛媛大学小児発達看護学 薬師神裕子）
共同開催：第 22 回公益財団法人がんの子どもを守る会（理事長：山下公輔）
- 5) 特別公演：Prof. Tariq Enver, Director, UCL Cancer Institute, UK（Cancer Stem Cell 関係）
- 6) 教育講演：仲野 徹教授、大阪大学（Epigenetics と小児がん）
- 7) チャリティー：チャリティーサイクリング in しまなみ（予定）
- 8) その他：12 日（日）にオプションを企画する予定

閉会の挨拶

議長は、以上をもって特定非営利活動法人 日本小児血液・がん学会の評議員会に関するすべての議事を終了した旨を述べ、閉会を宣した。